

TEIKOKU DATABANK Historical Museum

Muse

2017.2
Vol. 29

帝国データバンク史料館だより [ミューズ]

温故知人 10

知の世界へ誘うルリユール

— 修復を通して考える資料の保存 —

ルリユール製作 / 書籍・紙資料の修復家
岡本幸治さん

《逸品解題》雄勝硯・真壁石燈籠・尾張七宝

事業所のあつた街をたずねて(特別版) 榎太篇

知の世界へ誘うルリユール

— 修復を通して考える資料の保存 —

ルリユール製作／書籍・紙資料の修復家 岡本幸治さん



岡本 幸治さん (アトリエ・ド・クレ代表)

明治大学商学部を経て1977年フランスのUnion Centrale des Arts Décoratifs(U.C.A.D.)手製本科、箔押し科に入学。フランス教育省職業適性証明書(C.A.P. reliure main)を取得。1982年より池袋コミュニティ・カレッジ「ルリユール工房」講師。1992年一ツ橋大学社会科学古典資料センター「カール・メンガー文庫マイクロフィルム化・目録改訂・保存事業」に保存専門家として参加。1993年からブルガリア国立ソフィア大学スラブ=ビザンチン研究センターへ派遣。中世ビザンチン写本の保存作業を遂行。2001年から2010年までランビエンテ修復芸術学院講師。2016年より日本大学法学部図書館が所蔵する西洋貴重書の保存調査を担当。

■製本の世界へ ルリユールとの出会い

私は子どものころから本を読むのも好きでしたが、買った本の表紙を外し、自分で変えて楽しんでいました。それに変わった形の本があると買わずにいらなくて、物としての本に興味があったのです。

27歳のときフランスに行く機会があり、ルリユールを学ぼうと考えました。『モロッコ革の本』が出版されたところで、この本は筑摩書房で編集とブックデザインを担当していた柄折久美子さんが、ベルギーでルリユールの修業をし、帰国後に出したエッセイで、出発前に読んで私は希望を持ってフランスに行ったのです。着いた日のパリの街は毛沢東の写真だらけでした。言葉は分かりませんが、毛沢東が亡くなったと直感的に思いましたね。当時フランスと中国は非常に近い距離にありましたから。

パリには1年程度いれば技術が習得できると考えていたのですが、国立図書館で開催されていたルリユール作家の遺作展を見に行ったら、作品に圧倒されて、1年では無理だ、本格的に勉強しようと思

い、丸4年修業しました。5年目に入るころ、栃折さんに声を掛けられ、日本に戻ってきました。

ルリユールとはフランス語で製本という意味です。日本の一般的な製本との違いは、手作りであることと、工芸的な完成度を目指していることです。製本工芸とも呼ばれ、基礎となるのはヨーロッパの製本技術です。

装丁家、いわゆるブックデザイナーでは印刷でグラフィックな表現をすることに、ルリユールでは立体物の構造をデザインし、製作します。表紙の素材や見返しの色といった装飾の要素だけでなく、さまざまな時代の製本の技法を学び、自分の作品に取り入れて仕上げていく。それが表現として広がっていきます。

■帰国するもルリユールの市場はゼロ

1981年に帰国しましたが、ヨーロッパと違い、日本にはルリユールで食べていけない市場は全くありませんでした。そんなとき、栃折さんの仲介で金谷博雄さんにお会いしました。金谷さんは日本で酸性紙問題を提起した方です。私もまたまフランスでル・モンド紙に掲載されていた酸性紙に関する記事を読んでおり、金谷さんから「日本で酸性紙についての問題を知っている人に初めて会った」と言われ、意気投合しました。その後金谷さんの問題提起をきっかけとして、図書館

関係、製紙会社、それから現在の全史料協（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会）が集まって定期的な勉強会を開くようになり、私もこの問題を抜きにしてルリユールは語れないという意識があり、参加していったのです。

そのうちに各大学から書籍の修復依頼が入るようになり、92年には一橋大学の社会科学古典資料センターから声が掛かりました。メンガー文庫の2万冊のコレクションをマイクロフィルム化するにあたり、全ての蔵書が本格的な西洋の製本だったため、私が専門とする16世紀以降の出版物の製本の保存、修復ということと呼ばれたのです。このプロジェクトがひと段落したときに、帝国データバンクの信用録や会社年鑑の修復の依頼を受けました。

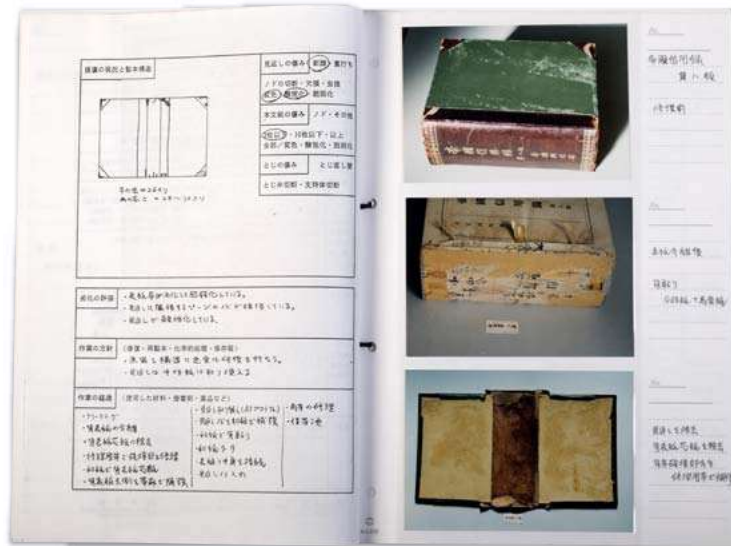
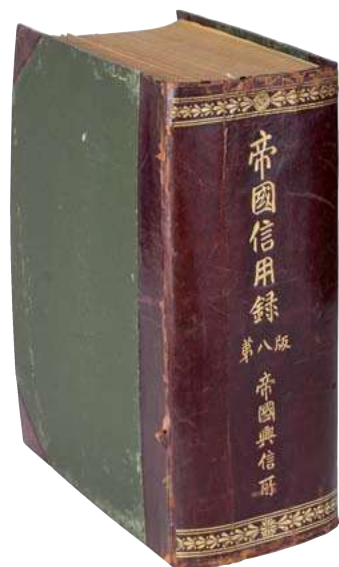
■傷み激しい信用録の修復失敗の中に新たな発見

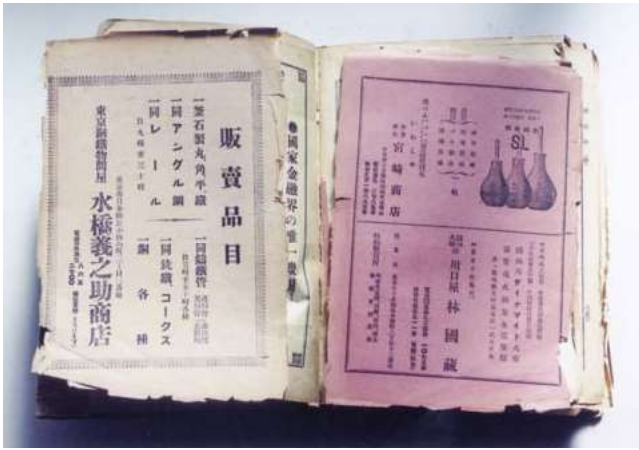
信用録などの修復をしたのは約20年前、15冊ほど手掛けました。信用録の22版は1回失敗したのでよく覚えていますが、背表紙の革を接着する際、デンプンのりの水分に酸性化した革が過敏に反応して硬くなり、実用的な柔軟性を失ってしまったのです。ドイツのバイエルン州立図書館で修復を手掛けていた知り合いに相談したところ、ドイツ製の保革油が届き、それを使って革を柔らかくし、再度剥がして修復しました。

背表紙の革の傷みは、経年劣化だけが原因ではありません。修復して感じたのは、日本の革は鞣しの質が良くないということ。外国の革に比べて劣化が早いのは、ヨーロッパの職人のように革をいいこなせていないからです。革というのは2層あり、下の層の方が物理的な力を持っています。ヨーロッパでは厚みをもたせた革を使うので丈夫なのですが、日本の製本、特に商業出版に使われるものは作業効率を高めるために、全体的に薄くすいて裏から紙を当て、布や紙と同じような形で処理してしまう。そのため見かけはとも良いのですが、一旦劣化が始まると弱いのです。

帝国データバンクから修復の依頼を受けたときは、史料館に展示されるとは思ってもいませんでした。しかし、展示ケースの中に自

分が修復した本が置かれているのを見ると、そのときのさまざまな作業工程が思い浮かびます。ガムテープだらけの会社年鑑も印象に残っています。テープの粘着剤の浸み込みがそれほどなかったのがダメージが比較的少なく、何とか修復することができた本でした。





一般的に書籍をマイクロフィルム化する際は上から撮影するので、会社年鑑のように分厚く開きにくい本は一度解体しなければなりません。国立国会図書館が80年代に明治時代の刊行物をマイクロフィルム化すると決めたととき、原形を壊すことになるのではないかと私たちは随分反対したのですが、媒体

■ 原裝保存と媒体交換 原形維持に大きな意味



交換することの方が大切だということを押し切られてしまいました。

和装本も洋装本も、技術的なことが異なるだけで修復の考え方は同じ、原裝保存が原則です。でも和装本もかつてはそうではなかった。宮内庁の書陵部でも当たり前のように糸の交換をしていましたし、虫損があれば裏打ちしていました。いまは原則的にやりません。80年代半ば、公文書館法が最初に成立したころだと思えますが、原裝保存の重要性が認識されるときにも保存は利用のためにあるという考え方が一般的になったのです。

■ 本当の保存性を高める製本とは 何度でも再生できる製本へ

現在ヨーロッパにおいて紙の修復に携わる職人のお手本は日本の技術、中でも掛け軸の表装の技術です。基本的に仕立て直すことを前提にして成り立っている、ので、剥がしやすい接着の仕方、組み立てています。すぐ元の状態に戻せて、すぐ復帰させることが可能な技術や構造は、保存の方法として優れているのではないかと。そういう視点を取り入れてルリユーも変わりました。

いままでの伝統的なルリユーは、とにかくがちがちに固めるやり方でした。カチツと作ることでよって保存性を高めるという考え方です。でもそういう製本は、ある瞬間パチンと壊れてしまい、しかも直すのが大変です。それならば初めから柔らかい構造で作った方が機能的で読みやすく、楽に元の状態に戻

すことが出来て保存性が高まるのではないかと。保存製本に取り入れる、あるいはそういう構造で作品を作る人たちもいます。修復の世界と製本の世界お互いの交流が進み、いろいろなことが行われています。

近頃、本の修復でよく目にするのは、見かけだけ直してくるという方法です。作業が早く終わる費用が掛からないということが第一原則になっているような気がしてなりません。本は使うものですから、使うだけの機能性と強度が回復しなければ直す意味がないと思います。いま、そこに思いをはせる機会が少ないのではないかと。実際に、手軽な修復をすることによって、かえって傷みが拡大する事例を多く見えています。

いまは電子書籍もあるので、中身を見るだけならそれでも十分だとは思いますが、私は初めから物としての本に興味を持ってこの世界に入りました。そのため、いまだにそういう本の作りに興味を持ち続けていて、古い本を見たり触ったりするだけで、いろいろな発見があります。それを現代のルリユーや修復に生かしていきたいと思っています。



逸品 解題

100年以上、
技術や技法を受け継いできた伝統的工芸品産地。
日本人の生活に密着、ものづくりニッポンの礎を築いた
「地の知」ともいっべき逸品を通して、
産地産業の現状をお届けする。

宮城県 雄勝硯



茨城県 真壁石燈籠



愛知県 尾張七宝



5世紀続く技、試練を越えて。 雄勝硯

文房四宝と称される筆墨硯紙。奈良時代に中国から入ってきた硯が国内でつくられるようになったのは、室町時代とされる。現在、日本の硯の産地は10カ所ほどで、宮城県の雄勝硯は山口県の赤間硯と共に国の伝統的工芸品に指定されている。

雄勝硯が生産されている宮城県石巻市雄勝地区は、リアス式海岸が続く小さな町である。硯に使われているのは雄勝の石とも呼ばれる玄昌石。この一帯には2億5千万年前の地殻変動で形成された玄昌石が埋蔵している。薄く割れるのが特徴で、その特性を活かした板状のスレートは屋根やタイルにも使われる。日本でスレートと呼ばれる岩を採石できるのは国内ではいまは雄勝だけである。雄勝硯生産販売協同組合の千葉隆志さんも「2012(平成24)年に創建時の姿に復元した東京駅丸の内駅舎の屋根に用いられたのは雄勝のスレートです」と語る。



雄勝の硯の歴史は口伝によると600年以上、室町時代からといわれ、「仙台藩主の伊達政宗公が雄勝の硯を使っていた」という記録があります。政宗公へ献上した硯の石が採掘された仙台藩の御留山はいまもありません(千葉さん)

雄勝の硯産業が他の産地と大きく違うのは、完全な分業生産ということにある。他産地は硯の原石を職人が自ら採石して作硯しているが、雄勝硯では採石業者・職人、産地問屋と分業された生産構造になっており、そのことが生産能力を高めた。

1950年代には雄勝の硯が学童の教材に採用され、生産量のピークを迎えるが、その後は中国からの輸入品が増えしてきた。「人件費などの問題もあり、雄勝の技術を中国に教え、製品を仕入れるようになっていきました。ビジネスとしては成功しても技術継承という点では厳しい状況に置かれました(千葉さん)

書道人口の縮小や少子化による生産量減少が続くところへ、東日本大震災で硯の生産設備の全てが流出するという試練が重なる。しかし最近では、20代と30代の若い職人を育成するために避難先から職人が指導に通う他、硯とそれ以外の県内の伝統的工芸品とのコラボレーションによる新しいもの

技術力とデザイン力で 生き残りを図る、真壁石燈籠。

茨城県中西部、桜川市の真壁地区。南北に連なるのは筑波山、足尾山、加波山の常陸三山である。一帯は花崗岩の産地で、愛知県の岡崎、香川県の庵治と共に日本の石材三大産地とされ、真壁の花崗岩は迎賓館赤坂離宮の外壁にも採用されている。



この地には鎌倉時代初期から室町・戦国期にかけてつくられた五輪塔や供養塔も現存しており、この時期が真壁の石工の初めと伝えられる。また、「真壁の石屋」の呼び名が刻まれた最も古いものは地区にある神社の鳥居で、江戸時代半ばには「石屋」「石工」と呼ばれる職人がいたことが分かっている。現在に続く真壁石工の祖ともいえるのが、久保田吉兵衛という石工で、彼の出現を機に、18の技法を用いる真壁石燈籠の伝統技法が定着した。その技は師弟相伝によって今日まで引き継がれている。

石燈籠とは、点灯設備の火袋を持った石造物をいい、神仏に献灯する道具として始まる。6つの部分から成り、伝統工

の職人が手掛ける。「石は硬いものですが、力いっぱい叩けば割れるかというところではなく、石の目を読むことなど、石の性質と道具の性質を理解して初めて一人前になります。今後は伝統的なものづくりと共に、時代に合ったデザインを提案できる力も必要とされていくでしょう(根本さん)

原料採取など、立地条件に恵まれた真壁の石材業も、中国からの輸入増加とともに製造業から輸入・販売業に転じるところも少なくないという。真壁石材協同組合の石堀さんも語る。「真壁石燈籠は庭に趣きを与え、『侘び』と『寂び』を演出するものです。長年にわたって培われた技術により、これからも産地真

づくりも始まっている。



雄勝硯生産販売協同組合

■宮城県石巻市雄勝町雄勝伊勢畑 84-1
■TEL: 0225-57-2632
■<http://ogatsu-suzuri.jp/>

地元の産業が町の名前になった、尾張七宝。

愛知県西部に位置するあま市は、広大な濃尾平野の恵みを利用した田園都市である。この地で七宝焼が産業として根

付いたのは、原材料の産地であったわけでも物流上の利点があったわけでもなく、ひとりの人物がきっかけだった。

梶常吉は1803(享和3)年、尾張藩士梶市右衛門の二男として生まれた。鍍金業を営んでいた常吉は独学で七宝焼の研究を始め、33(天保4)年、小皿を完成させる。海東郡遠島村(現あま市七宝町遠島)の林庄五郎に製法を伝えたことから、この地域で七宝製作と技法の研究が盛んになった。

あま市七宝焼アートヴィレッジの学芸員である小林弘昌さんによると「この辺りで七宝焼を盛んにつくっていたので、明治時代に七宝村と改名しました。拳母という町にトヨタ自動車が来たこと

で豊田市になった例に近いと思います」。

七宝焼とは、銅などの金属の素地の表面にガラス質でできた釉薬を焼き付けた工芸品である。七宝とは、仏典の金、銀、瑠璃、真珠など7つの宝をいい、七宝焼はそれに匹敵する美しさということ

でその名が付いたといわれる。88(明治21)年創業の七宝焼窯元、田村七宝工芸の4代目田村丈雅さんに技法を伺った。「七宝製作で最も大変な作業は釉薬をつくることです。必要な色数はもちろんのこと、濃淡を表現する際、絵の具なら水で薄めればいいのですが、釉薬はそれができないので、中間色も全てつくらないければなりません。明治時代の名品を見ると、15段階ぐらいでぼかしているものもあります。現代は6段階ぐらいでしようか。この釉薬づくりは各窯元独自の原料の配合比率があります」

芸士の根本忠さんによれば「私の父親世代ですと、何十人も職人が工場で働いていました。昭和40年代は造園ブームのため、ひとりずつくってはい間に合わない

ので、石工によっては分業して人海戦術で製作していたところもあったようです」。最盛期には一部の工程が簡略化された石燈籠づくりだが、その後量より質という考えにシフトし、伝統的な技法でのものづくりを復活させた。いまでは墨出しから仕上げまでひとり

壁としての伝統を保持し、外国製品の輸入攻勢に対し、新たな発展の道を模索、追求していきます」

真壁石材協同組合

■茨城県桜川市真壁町真壁 402 番地
■TEL: 0296-55-2535
■<http://www.ibarakiken.or.jp/makabe/>

七宝町七宝焼生産者協同組合

■愛知県あま市七宝町遠島十三割 2000
アートヴィレッジ内
■TEL: 052-441-9802
■<http://www.city.ama.aichi.jp/sangyo/3248/003471>



尾張の七宝焼は、67(慶応3)年のパリ万博に出品されたのを機に世界各地の博覧会に次々と出品され、世界的に評価

が高まった。明治時代後期には七宝組合の加入者が100人に達しているが、これは窯元と呼ばれる経営者なので100社と言え換えることができる。しかしいま、窯元は8軒まで減り、そのほとんどが70歳以上である。若手と呼ばれる職

人が50代半ば過ぎであるため、10年後には現在の半数が残るか残らないかという状態だ。

七宝焼は皇室から外国の賓客への贈り物にも選ばれ、さらに勲章にも用いられている。バブル崩壊後は一気に市場が縮小したものの、日本を代表する工芸品としてその技法は継承されている。

事業所のあった街をたずねて(特別版)

近くて遠い、こころ残す町
酷寒の地に託した夢はるか

樺太篇



栄町に移転した当時の樺太支所



当時の大泊栄町付近



地図帳を見ると、北海道の真上に大きな鉾先を突き出しているような島がある。ロシア名でサハリン島、わが国ではかつて樺太と呼ばれていた。ロシア本土とはわずか幅7kmの間宮海峡(ネヴェリスコイ水道)で隔てられ、北海道宗谷岬とも40kmの近きにある。面積は北海道よりもやや小さいが、地形は異常に細長く、横幅が狭い所で25km、広い所でも160kmしかなく、逆に縦には1,000kmもある。戦前期、この島に渡った日本人は40万人を越え、数多くの企業が進出。帝国興信所(帝国データバンクの前身)も支所を構えていた。

■不況打開、 最果ての地に拠点開設

樺太支所の開設は1923(大正12)年8月。直接の目的は調査の至便性向上とされたが、

実際は行き詰まりを見せはじめた経営環境を打開することにあつた。当時、内地は第1次大戦の戦後恐慌以来の不況が慢性化した時期であつた。

事務所は当初、豊原、真岡、野田、泊居なども



樺太の表玄関として栄えたコルサコフ(旧大泊)港

候補地に挙がっていたが、最終的に大泊(現コルサコフ市)に決まった。大泊は、北海道稚内と宗谷海峡を挟んで向かい合う開港場で、樺太の表玄関として内外の船舶が集中。内地との連絡に便利で、島内の貨客が集散するなど、当時は樺太庁が置かれていた豊原(現ユジノサハリンスク市)に匹敵する市勢だったからである。

樺太支所の活動が本格化するのは、30(昭和5)年以降のことである。30年近い植民殖産の結果、樺太経済は大きく成長。25年当時、約20万人だった島内人口は、「海の向こうに行けばカネが獲れる」といわれ、その後5年間で1・5倍、30万人に達し、35年に33万人、40年には41万人とほぼピークに達した。アジア太平洋戦争が始まってからも、樺太支所はそれなりの調査需要はあったようだ。空襲に脅かされた内地事業所と異なり、終戦間際まで比較的落ち着きを保っていたからである。

それが45年8月9日、旧ソ連の軍事行動によって、樺太も猛攻撃を受けた。15日の詔勅放送後も当地での戦闘は終わらず、樺太各地に砲撃、空襲が加えられ、すでに閉鎖されていたが、出張所があった真岡(現ホルムスク市)には、その日、艦砲射撃とともにソ連軍が上陸。樺太終戦時の悲劇は、各地住民の逃避行、避難船への爆撃など悲痛な体験談として残っている。

樺太支所も、敗戦による大混乱の中で、20余年の歴史に終止符を打つことになったが、支所最後の様子を知る手掛かりは残っていない。戦後4年たった49年に刊行された『樺太人名録』(全国樺太連盟)に、樺太支所

長と同じ「中村繁の名前と」函館市本町91(帰省先)、「大泊町在住」(現住所)が記載されているだけだった。



歴史的建造物として保存することが決まった
旧北海道拓殖銀行大泊支店の建物



移転した樺太支所のあった「本町東一条南4丁目」
旧大泊町役場に隣接しており、門柱は当時のもの。コルサコフ(旧大泊)



日本時代のパルプ工場の残骸。ホルムスク(旧真岡)

■20年間に事務所移転4回

樺太支所の事務所は、敗戦で閉鎖を余儀なくされるまでの約20年間に、大泊町内を計4回移転している。

開設地の船見町(当時)は、コルサコフ(旧大泊)駅から車で南に10分足らず。十数年前まで段ボール紙工場として稼働を続けていた元王子製紙大泊工場の正門、元栄町郵便局跡を通り過ぎてすぐの所である。支所事

務所は、船見小学校に隣り合わせ、「船見町本通り」(現モルスカヤ通り)に面していたが、現在、その辺りは大きく様変わり、事務所があった場所は特定できなかった。

次に移転した「本町東一条南4丁目」「同東二条通北1丁目」「同大通北1丁目」は全て徒歩10分圏内にあり、いずれも町の中心部である。現在、事務所のあった場所にはそれぞれアパート、児童図書館、コルサコフ市役所などの建物が建っている。かつての「大

通り」は「ソビエツカヤ通り」と名称を変え、市内のメインストリートである。

支所最後の場所「栄町」には、コルサコフ駅から車だと2分もかからない。当時は、商工会議所や銀行が並ぶいわばビジネス街だった。支所跡はやはり空き地になっており、社会主義時代特有の四角いそつけないアパートが隣接していた。すぐ近くには十数年前まで国立銀行コルサコフ支店として使用され、いまは半ば廃墟と化した旧北海道拓殖銀行大泊支店の灰色2階建て石造りの建物が残っていた。しかし、この建物は最近、歴史的建造物として保存される動きが広がっているようだ。

■真岡出張所、港を見下ろす高台に

樺太には大泊以外にもう1カ所事業所があった。樺太支所真岡出張所である。1925(大正14)年11月1日に開設、5年後の30(昭和5)年6月に閉鎖された。日本統治時代の真岡町は、樺太西海岸の不凍港を抱える重要な拠点であったが、28年に豊原と真岡を結ぶ豊真線が開通し、大泊からの出張で真岡地区の調査に対応できるという合理的な判断であった。

真岡町は背後に山がせり上がる南北に細長い港湾都市で、ロシア本土のワニノとサハリンを結ぶ定期連絡船が発着している。真岡出張所は最初、真岡町山手町に事務所を持った。真岡港を間近に見下ろす高台で見晴らしの良いところにあり、当時は坂を下れば、すぐ近くに真岡神社や裁判所、庁立真岡

病院などがあった。現在、出張所があった場所は立ち並んだ住宅アパートが途切れる崖っぷちとなり、真下を鉄道が通っていた。

そして、出張所開設1年後の26年9月には、町の中心部にある真岡町本町4丁目に事務所を移転した。敗戦直後の悲劇を象徴する事件のあった電話局とは目と鼻の距離である。いま出張所跡には鉄筋中層アパートが建ち、出張所が開設されていた当時をしのぶものは何も見当たらなかった。

しかし、車で10分余りも走れば、線路に沿って、かつて栄えた樺太パルプ工場の無残に朽ち果てた姿が目に入り、酷寒の地に広げた日本人の夢を照らし続けた灯台がいまも建っていた。



いまも残る日本時代の灯台。ホルムスク(旧真岡)

PICKUP

当館研究員が学会誌に論文を発表、京都大学で報告も

帝国データバンク史料館の橋本陽研究員の論文「電子記録をどう整理するか—インターパレスとイタリア・アーカイブズ学における知見に依拠して—」が記録管理学会誌『レコード・マネジメント』第71号(2016年12月発行)に掲載されました。

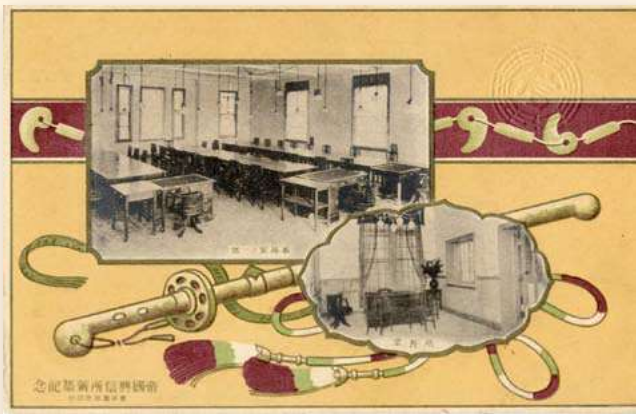
また、2017年1月21日に京都大学北部構内理学研究科セミナーハウスで開催されたワークショップ「デジタルアーカイブの再設計～資料の利用のために何をすべきか／何ができるか～」で、同研究員が報告を行いました。報告名は「伝統的アーカイブズ学の理念を反映したデジタルアーカイブ」でした。

論文および報告の概要は、ヨーロッパの中でも特に古い伝統を持つイタリア・アーカイブズ学の理論を紹介し、今日避けては通れない電子記録とデジタルアーカイブに関わる諸問題を解決するのにどのように活かせるのかを検討するというものでした。ワークショップでは、報告後、デジタルアーカイブについて侃侃諤諤の議論となり、非常に有意義な時間となりました。



ワークショップの様子[写真提供：次世代デジタルアーカイブ研究会]

「帝国興信所新築記念絵葉書」を入手しました



このほど帝国データバンク史料館では、いまから約100年前、帝国興信所(帝国データバンクの前身)が本社ビルを新築するにあたり作成した絵葉書を入手しました。

1918(大正7)年、当社初の自社ビル完成を記念したこの絵葉書には、所長室と事務室内の写真が印刷されています。

関東大震災により、わずか4年余りで倒壊したため、旧本社の写真資料は当館の収蔵品の中でも数少なく、収集に努めている資料のひとつでした。古典主義様式を基調としながらも当時の流行を取り入れた社屋の内観の一部を、今回の発見で新たに確認することができました。

■帝国興信所新築記念絵葉書



表紙のご案内

帝国データバンク 事務服

事務服の支給開始時期は不明であるが、1987(昭和62)年3月末日をもって着用の慣行を廃止したことが記録に残っている。時代ごとにデザインは異なり、帝国興信所を表す「Teiko」や「T.D.B」の胸の刺繍がその変遷を伝えている。女性従業員は出勤すると事務服に着替え、業務に従事した。入社当初から着用していた社員によると、事務服は、着ることによって仕事に向かう気分が高まった他、活動しやすく、汚れを気にしないで済む機能性があったという。その言葉の通り、袖や前身頃には、日々大量の調査報告書を持ち運んでいた痕跡が残っている。



〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL.03-5919-9600 (直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

[入館料] 無料

[開館時間] 10:00~16:30 (入館は16:00まで)

[休館日] 土・日・月曜日および祝日、年末年始

(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分

中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分

都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分

丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介しています。

www.tdb-muse.jp